

表1 果菜類使用苗数と接木率・接木購入率 (百万本)

品目	作付面積	使用苗数	接木率	接木苗数	接木購入率	
					2001年	2001年
トマト	13,600 ha	272.0	55.0%	149.6	47%	70.3
キュウリ	15,200 ha	228.0	83.0%	189.2	34%	64.4
ナス	13,300 ha	186.2	60.0%	111.7	63%	70.4
スイカ	16,900 ha	118.3	90.0%	106.5	34%	36.2
メロン	13,800 ha	110.4	20.0%	22.1	5%	1.1
合計	72,800 ha	914.9	63.3%	579.1	42%	242.4

※作付面積：2002「野菜統計要覧」野菜供給安定基金より

※使用苗数：慣行栽培10a当たり栽植株数をもとに算出

※接木苗数：「野菜の接木栽培の現状と課題」野・茶試をもとに推定

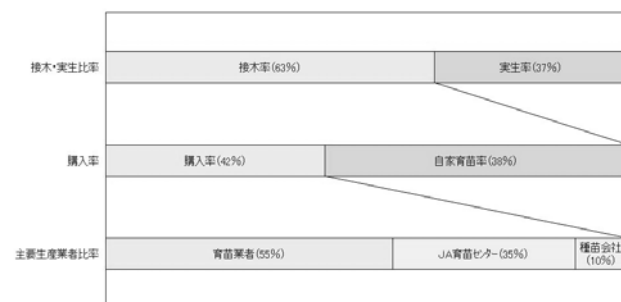
※接木購入率：野菜茶試研究資料をもとに推定

1億3,750万本の供給を行っています。

現在、約100社から構成されている日本野菜育苗研修会では、約9,000万本の生産が行われており、うち約5,000万本は主要5社にて生産され、残り95社で4,000万本程度の生産がされています。

図1

果菜類主要5品目の苗使用における各種割合



#### 4 マーケット環境

ハウス栽培の普及に伴う効率化と技術水準の低下・高齢化に伴い（家庭菜園の増加も含め）、購入苗マーケットが拡大し急成長しています。

それだけ急速に拡大しているマーケットならば、他業界も含めた業者がなぜ参入してこないのかについて触れたいと思います。

衰退する農業業界の中で唯一急成長する果菜類の接木業界に、大手種苗メーカー等の農業業界関連企業、及びJ A関連として各県の経済連が、5～7年前に相次いで参入しましたが、近年縮小・撤退している実情についてお話しします。

#### 1) 技術的側面

企業及び経済連のナーサリ部門は、接木苗業界への進出にあたり最も重要な「接木の工程」を機械による「自動接木ロボット」を全面的に採用し、資金力に物言わせて参入してきました。

この自動接木ロボットが、当初想定する能力である歩留まり90%を確保できれば問題なかったのですが、接木する前工程の第一次育苗（穂木・台木の育種）が、想定どおり均一にできず、事業化の段階では、歩留まりが70～80%台に低迷。経済効果を発揮できませんでした。

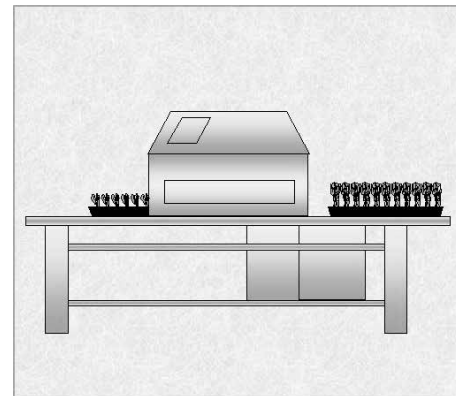


図2 接木ロボット (イメージ図)



接木作業風景